

上代語における「不定語+ト」引用句と潜伏疑問文、間接疑問文

山田伸武

「太郎は誰が『雪国』の作者であるかを知らない。」と「太郎は『雪国』の作者を知らない。」とは文内容として等価と見られる。前者のように疑問文が補文として埋め込まれた文は間接疑問文(indirect question)と呼ばれ、後者のように補文として埋め込まれた疑問文と等価の働きをする名詞句(下線部)を文中に持つ文は潜伏疑問文(concealed question; CQ)と呼ばれている。このように現代日本語は間接疑問文と潜伏疑問文とを両方持つが、日本語において間接疑問文の成立は後発的なものであるということが近藤泰弘(2000)『日本語記述文法の理論』(ひつじ書房)や高宮幸乃(2004)「ヤラ(ウ)による間接疑問文の成立—不定詞疑問を中心に—」(『三重大学日本語学文学』15)等に往々述べられている。特に、上代日本語には間接疑問文は存在せず、潜伏疑問文が間接疑問文と同様の表現を担っていたのではないかと高山善行(2018)「上代語の潜伏疑問文をめぐって——「知らず」構文の場合——」(国語語彙史研究会(編)『国語語彙史の研究 三十七』和泉書院)は述べている。ただ、先行研究においても、日本語において間接的な疑問を表現する際の方略がどのように通時展開していったかについては未だ明らかにされていないことが多い。

本発表では高山(2018)において取り上げられながら、関係の無いものとして考察のなされなかった「逢はむ日をその日と知らず[安波牟日乎其日等之良受]」(萬 3747)のような「引用句」に着目する。同例文は現代語における「逢う日を知らないで」「いつ逢うか知らないで」という文と等価にも解釈される。ここから潜伏疑問文や間接疑問文と引用句との並行性が示唆される。Oxford-NINJAL Corpus of Old Japanese (ONCOJ)を用いて不定語の直下に引用の接続助詞トが接する用例を調査したところ、「道行き人を誰と知りてか[路行人乎跡跡知而可]」(萬 3102)のような境界例が確認出来たため、上代日本語には高山(2018)の述べるような潜伏疑問文だけでなく「引用句」という間接的な疑問表現の方略があり、疑問表現が補文に入り込む嚆矢となったと結論付ける。